

世界の著名な特許にみる ————— 第22回

世紀の発明事業列伝

〈その思いつきが、時代を動かす〉

ギエモンこと田中久重・幕末維新「久留米編」

激烈な時代の中で発明考案の歩みを続ける

中村奇輔の実験事故・息子と孫の斬殺・上海密航・久留米藩難事件



芸術・科学・知財クリエイター・弁理士（雅号）

大樹 七海

はじめに

前回（連載第21回）にて、ギエモン家族・一門と、ギエモンの仲間たちが、蘭医佐賀藩士・佐野常民に導かれ、彼らの居住地京都から、名君佐賀藩主・鍋島直正の治める佐賀（肥前）へ移住し、活躍する話を「佐賀編」として現地取材も交えて、お伝えしました。

ギエモンの家族たちとは、ギエモン、妻与志、二代目ギエモン（婿養子）、孫、そして弟子たちで、ギエモンの仲間とは化学の中村奇輔、翻訳の石黒寛二です。

今号は、前回の「佐賀編」の終わりの時期に重複してスタートする「久留米編」であり、連載第19回久留米取材も併せて参考にして頂ければと思います。

前回のおさらいからですが、佐賀へ移住したギエモン、二代目ギエモン、孫、中村奇輔、石黒寛二、佐野常民の6人全員とも、広瀬元恭先生（義理の弟、ギエモンの妹イネの

夫）が京都に開塾した蘭学塾「時習堂」の門下生である俊英たちです。さらに、二代目ギエモン、中村奇輔、石黒寛二は同世代で仲良しです。

佐賀藩にて、彼らは科学技術に懸ける熱い思いで結ばれていて、名君・直正の下で、艱難辛苦に耐えて、国家の危機に対して多大な技術的貢献を成し遂げたことは、お伝えした通りです。しかし、この裏には、辛く悲しいエピソードもあります。

今回は、それを避けては、人間社会や人類の歴史の愚かな面を学ばず、発明事業における逆境をも理解できませんし、そうした激烈な時代の流れにあっても、ギエモンは変わらず、いつも通り仲間を助け仲間に助けられ、世のためひとのため発明考案をし続け、歩みを止めずに前に進み続けていきます。著者の大変尊敬するギエモンの歩みを、深く感じとることに繋がっていきます。重苦しい回となりますが、ご承知おき下さい。

今号のダイジェスト 幕末・維新「久留米編」

ギエモンの生まれ故郷である久留米藩では、ギエモンの佐賀藩での活躍を聞きつけ、ギエモンの呼び戻しにかかります。その結果、66歳のギエモンは、しばらく佐賀藩と久留米藩を兼務することになり、ギエモンは久留米藩でも大活躍します。しかし仲間の中村奇輔が実験事故で重傷を負うこと、さらにはギエモンの息子 二代目ギエモンと孫が長崎で斬殺されるという悲劇が起きることをお伝えします。

その苦難に耐え、鍋島直正、佐野常民らと「凌風丸」を完成させ、時代の要請に応えた佐賀藩での仕事が一段落すると、ギエモン一家は30年ぶりに久留米藩に帰郷します。

しかし、明治元年になると、久留米藩内で起きた、攘夷派による暗殺クーデターに続く一連の恐怖政治により、久留米藩内では時代が逆戻りし、開明派の洋学者や技術官僚は死に追いやられ、ギエモンの久留米での後ろ盾である、佐賀藩改革の旗手 今井栄は切腹に追い込まれます。鍋島直正も病死し、久留米でも佐賀でも攘夷派による反乱が続き、新政府により鎮圧され、一連の抗争荒廃でギエモンの活躍していた佐賀や久留米では、官需も民需も途絶え、ギエモンの命も危うく、前途は閉ざされて行きます。

この危機に及び、既に新政府の要人となり東京で活躍していた佐野常民を筆頭に、かつての佐賀藩での仲間達は、ギエモンの身を案じて東京入りを促します。

今回は、次回予定している「東京編」に至るまでの、「久留米編」をお伝えするものです。

1. 発明仲間・中村奇輔の実験事故

佐賀藩にて、新進気鋭の理化学研究所として発足した、佐野常民の率いる「精錬方」にて、ギエモン、二代目ギエモン、中村奇輔、

石黒寛二が精を出し、ギエモンに久留米藩からの打診が来た時期、化学のスペシャリスト中村奇輔（40歳）が爆発事故を起こし、重傷を負ってしまいます。その時のことを、中村奇輔の次男、林太郎（後にギエモンの養子となる）が以下のように書いています。

「実父中村奇輔発明のコーベルドンドル（爆薬）を住宅にて試作中に、不意に爆発し、実父の座せる垂木板を粉碎し、大なる木片、実父の大腿部に突き入り、負傷のすこぶる惨なりしたため、人みな驚愕し、これを抜き取る勇気がなかったが、近江（ギエモン）が馳せ来たり、負傷を一見し、ただちに自宅に馳せ帰り、鼈甲細工用の大箸を持ち来たり、それから実父（中村奇輔）の大腿部に両足をかけ、木片を抜き取り、負傷の後患を僅少ならしめた」

ギエモン（田中久重は、技術者最高の称号「近江」との尊称でも呼ばれます）は、冷静な判断と知見、行動力にて、中村奇輔の手当を早急に行い、命を救います。中村奇輔は失明し半身不随となり、維新後は水ヶ江士族屋（中・上の武士が住む）に移され、家督は長男の喜一郎が継ぎ、喜一郎は佐野常民に伴い海外修行に行きます。中村奇輔は明治9年（1876年）に佐賀で永眠しました。

2. ギエモン、久留米藩に呼び戻され、佐賀藩と兼務に



筆者撮影 現在の久留米城跡

佐賀藩でギエモンが「凌風丸」の建造に心血を注いでいたちょうどその頃、故郷の久留米藩から、ギエモンに帰藩の要請が来ます。